

# オール マイ ピンポン

二十九期生 橋本 ユキ子

いつの頃からか何よりも卓球が好きで自分がいた。西高に入学し、何も様子がわからない時からクラブは卓球と決めていた私、入ってからのトレーニングに自分の力では無理なかなど不安を覚えたものだ。でも、自分の体力の限界の中でフルに技を發揮して、強くなればいいではないか、しかし、『卓球部』となるとお互いの連帯感を基調とし、各々が技を磨くものだから、私がクラブの雰囲気をごわすことになるのだろうか？ でも、仕方がない。私は卓球が好きなものだから、少しの迷惑は許してもらおう——。こんな感じで始まった私の卓球生活だったが、日々の短い練習時間にあせり、いったい練習時間の短さを克服して上達できる道なんてあるのだろうか、と、球拾いの中で先輩の技術に見とれたり、本で研究してみたりして限られた練習時間の中でためしてみたものである。強くなりたくないと、勉強などそっちのけで頑張ってきたクラブなのに、一年の合宿前は体調が最悪の状態で、医者は不参加を強制するし、渋る家族を説き伏せて薬をのみながら、ためになるまではと参加した。その甲斐あつてか都立戦

では先輩たちと組んで、団体戦準優勝という戦果。

九月、先輩たちが引いていき一年生が六名ということになってしまふ。マラソンの出来ない部長では、クラブに活気が生まれるはずがない。それ以来、女子卓球部は体力の消耗を避けて実の部分だけ、怠惰にして優雅なクラブへと変身してしまつた。練習試合もこなさず、いったいどうやって上達していけるでしょう。トレーニングや他校との練習試合、その後の語らいの中から連帯感が生まれ、技術の開眼もあるのだから。しかし、二年の運動会の日、全国大会予戦Wの時は、試合前二日間白山女史とふたり、納得のいくまで練習をした。その甲斐あつてか五回戦まで進み貴重な体験をした。卓球がすべてであけられた高校生活であつたが、それだけに得たことも、考えさせられたことも多く、卓球に対する姿勢も徐々に固まつていった。要は「やる気」だと。そして研究する心だ。ひとつでも多く自分のものにしよという努力が必要なのである。迷いのあるまま中途半端に続けても、ただ敗北感を大きくするだけだと思ふ。もう一つ大切なことは、自分が卓球をしていることに誇りが持てるということである。それがあれば少々のことはふっkillるものだ。これらが達成できてこそ充実感と勝利を手にできるのだと信じている。

この様に考えていると今でも卓球が好きで私。これから先、再びラケットを握るかどうかわからないが、クラブに誇りが持てたこと、しあわせだったなと思いつつ筆をおく。